

# 共生とエコシステムからみた古代の北方世界

瀬川拓郎

## 1 文化の融合から文化の隔絶へ アイヌ文化とアイヌ的形質の成立過程

今日の話、第一点目は、アイヌの文化、アイヌ的なヒトとしての形質がどのように形成されていったのか、という点。結論的にいえば、アイヌ文化は、10世紀前後に、それまで流動的だった北海道と本州の文化的な境界が固定化されて、差異が拡大していった、つまり北海道集団の文化的なアイデンティティが凝集していったものといえると思う。まずこの点についてお話したい。

では、なぜ両者の差異が拡大していくことになったのか、といえば、もちろんそこには律令国家の政治的な支配の問題がかかわっているわけだが、そのこと以上に、商品流通・交易の展開に注目しなければならないと思う。

10世紀以降、青森では鉄製産・須恵器生産などが活発化する。これらは北海道向けの交易品だったのではないかと考えられている。これに対して北海道では、私が縄文エコシステムからアイヌエコシステムへの転換と呼ぶ狩猟漁撈への特化がはじまる。この変化にも本州との交易がかかわっていたとおもわれる。交易をめぐって、北海道は狩猟漁撈へ特化し、対岸の本州では手工業生産やコメ生産に特化していく、文化の差異拡大の現実的な基盤は、こうしたところにもあったとおもわれる。この点についても少し具体的にお話したい。

ところで、文化の差異が拡大していけば、当然両者には排他的な側面が強く立ち現れてくるはず。つまり交流やコミュニケーションは難しいものになる。しかし、擦文文化は多くの物品を本州との交易に依存し、それによって鉄器文化を維持していた。もちろん本州も、獣皮や海産物に強く期待していた。

つまり、両者は文化の差異を拡大する一方で、反対に相互に補完的な関係、共生の関係を深めていったといえる。この逆説的な状況を可能にしたのは、10世紀に道南の日本海沿岸に成立したクレオール文化、マイノリティー文化、私が青苗文化と呼ぶものであったといえる。

この集団の内容や性格、その歴史的な展開についてもお話ししてみたいと思う。

この3つのお話しを通じて、北海道の古代文化の概要説明に代えたいと思っているが、なにぶん時間も限られているので、駆け足で進めていきたい。

まず、年表で北海道の文化の変遷について大枠をみておきたい。

擦文文化は、8世紀前後に東北北部から道南や道央へ移住した集団がもたらした古代日本の文化を、在地の続縄文文化の人びとが文化コンプレックスとして受容し、成立したものだ。オホーツク文化は、5～13世紀ころにサハリンで展開した海洋適応に特徴をもつ文化であり、人びとの形質はアムール川下流域に暮らすナナイやウリチなどに近いとされる。

次にアイヌ的形質の形成の問題について。文化圏のあり方は縄文時代は一貫しており、地域性をもった文化が重なり合いながら連鎖している。これが8世紀ころまでは同じであるが、10世紀前後に重なり合いがなくなり、文化の境界が固定化されていく。

ヒトの形質が、境界が固定化されていくなかでその固有性を深めていき、アイヌ的形質（徐々に顔面が細く、高くなる。全体の骨格が繊細化）が成立する。ただし、道南アイヌには和人的形質、道東アイヌにはオホーツク文化的形質がうかがえるといわれる。

トビニタイ文化の同化によって、その文化伝統がどうなってしまったのか、ほとんど議論がないが、同化されてただ消えてしまったということは、ありえないといえる。トビニタイ文化の同化を通じて、北回りの農耕文化や樹皮を多用する建築文化が擦文文化のなかの地域性として残存していった可能性、オホーツク文化人の形質そのものが近世アイヌの地域性として残存した可能性もある。これらに注目する必要があるが、今回は時間がないので深くは説明しない。

## 2 拡大する差異と共生のシステム 中間領域におけるクレオール集団の生成

このように本州と北海道の文化的な差異が固定化されていくなかで、10世紀中葉に本州の土師器文化と北海道の擦文文化の融合文化が道南の日本海沿岸に成立する。

この文化は、渡島半島部で大規模調査がないため全体像が不明で、長らく擦文文化の地域色と理解されてきた。しかし近年の調査によって擦文文化とは明らかにちがう内容をもつことがわかってきた。クレオールであるトビニタイ文化をオホーツク文化と区別するように、この西南部の文化を擦文文化そのものと区別する必要がある。わたしはこの文化を最初に注目された奥尻島の遺跡にちなんで「青苗文化」と呼んでいる。

この「青苗」の住居は長方形の浅い竪穴（壁立ちの半地下式）と平地式が混在し、擦文の深さ一桁前後もある方形の竪穴住居と異なる。カマドの構造や柱の位置や数もちがう。「青苗」では住居が切り合っており、これは本州の遺跡では普通のことであるが、擦文の集落では例がない。さらに「青苗」の集落には環濠をもつものがあり、これも擦文には認められない。つまり「青苗」と擦文では、住居の間取りや外観だけでなく集落の構造や景観まで異なっていた。

このような「青苗」の住居や集落の特徴は青森と共通する。環濠をもつ集落は一世紀中葉以降、青森を中心に展開したいわゆる防御生集落との関連が考えられる。四本柱の竪穴住居から壁際に多数の柱がめぐる半地下式住居への転換も同時期の青森で認められる。

青苗遺跡でみつかった木枠の井戸も擦文では例がないが、青森では確認されている。

「青苗」の土器は、ロクロ成形を欠くことなど全体の印象は擦文土器に近いが、器形・成形・調整すべてにおいて擦文土器とも土師器とも異なる。

「青苗」では鍛冶関係遺物（鉄滓・羽口）がどの遺跡からも例外なく出土し、文化全体が鉄器生産に大きく傾斜していた。これは擦文にはない様相。一方、青苗遺跡の貝塚はア


シカとアワビでほとんど占められていた。北海道在地の伝統的な生業を継承しており、生計活動も融合的な性格をもっていたといえるが、その内容は多様性に富んだ縄文時代の貝塚のあり方と全く異なる。これも後で述べるアイヌ・エコシステムへの転換を示していると思う。

「青苗」の土器は青森でも出土しているが、その分布は日本海側の岩木川水系にかぎられる。これに対して津軽山地をはさんで東側の陸奥湾岸や下北半島で出土しているのは擦文土器、それも馬蹄形文様を刻んだ粘土帯をもつ噴火湾・日高・石狩低地帯の「道央型」擦文土器である。

つまり青森でも岩木川水系の集団は北海道の「青苗」集団と交流し、陸奥湾周辺の集団は北海道太平洋沿岸の道央型擦文集団と交流していた。「青苗」土器が陸奥湾側で出土した例、反対に道央型擦文土器が岩木川水系で出土した例はほとんどないから、岩木川水系集団と陸奥湾周辺集団はたがいに別個な経済圏を構成していたようだ。

このような「青苗」集団が土師器集団を母胎として成立したのか、あるいは擦文集団を母胎としたのか明らかではない。しかし、かれらがどちらに帰属すると認識していたのかわかる手がかりがある。それは擦文集団と「青苗」集団が共有していた「記号」だ。

この土器の底に記号が刻まれた坏が出土するのは、日本海に面する「青苗」の各遺跡と「道北型」擦文土器の分布圏のうち日本海に面した遺跡にかぎられる。

刻印記号のモチーフは「×」「+」とそれから派生した文様が全体の七六分、「-」とそれから派生した文様が一分、とそれから派生した文様が六分を占める。この出現傾向は道北でも青苗文化でも共通している。

しかし詳細にみると、たとえば刻印の先端にくわえられた「かえし」や矢羽の向きが、道北ではいずれも外向き、道南の例では内向き。中間地帯の道央の擦文集団の刻印は、いずれも内向きで「青苗」に固有のモチーフ。つまり刻印記号は、基本モチーフは日本海沿岸全体で共通しつつ、道北の擦文と「青苗」では一般的なモチーフが異なり、さらには集落レベルでもちがいがあるといふ段階的な分節構造をもっていた。

この刻印の意味を考えるうえで、これに類似するアイヌの祖が注目される。アイヌの祖印は長男から長男へ伝えられる男系集団のシンボル。必ずしも男系の血族だけに厳密に伝えられたのではなく、移住してきたよそ者に自分の祖印を与えて同族とした。さらに養子に出された人間が自身の祖印と養子先の祖印を組み合わせる新しい祖印をつくることがあり、よそ者に祖印をあたえる際、みずからの祖印そのままではなく文様の一部をあたえることもあった。よそ者が多く入り込んでくる地方では祖印のバリエーションを次々つくってあたえることもあった。

刻印が仮にこのようなアイヌの祖印と同じ性格のものであったとすれば、そのモチーフが段階的な分節構造をもっていたことも無理なく説明することができる。つまり道北と「青苗」に共通する「×」「+」の刻印は、同祖にまつわる基本モチーフとして当初に成立したものであり、次いで道北と「青苗」それぞれに固有な「内向型」「外向型」のモチ

ーフが分節し、さらに下位の集団レベルで多様なバリエーションが生み出されていったと理解できる。

刻印が同祖関係を表象するものとするれば、「青苗」集団は土師器集団ではなく擦文集団に帰属意識をもっていたことになる。たとえそれが祖印ではないとしても、刻印に表象される固有の精神文化の共有を通じて、「青苗」集団と日本海沿岸の擦文集団が深層で結びついていたのはまちがいない。

擦文文化が本州の鉄器によって成り立つ鉄器文化であることはすでに述べたが、擦文社会はそれ以外にも本州から多くの産物を移入していた。佐波理と呼ばれる青銅鏡・漆塗椀・コメが一世紀以降の遺跡でみつまっているほか、一世紀前葉に本格操業を開始した青森県五所川原窯の須恵器が北海道全域で出土している。また一世紀以降、大陸産とみられるガラス玉がおそらくサハリン経由で流通する。

道北の日本海沿岸の集落をみると、天塩川や小平薬川、古丹別川など大中河川の河口付近に成立している。広く調査された小平町高砂遺跡をみると、集落は船溜り地形を核に成立しており、河口港の性格を示している。各遺跡は日本海沿岸の中継交易に深くかかわっていた。一世紀前後に北海道の日本海沿岸に交易拠点が一斉に成立し、同祖関係を表象する刻印を共有してヨコの連携を強めていくのは、このような本州やサハリンとの交易の活発化によると思う。

日本海沿岸の交易体制をあらためてみると、擦文集団と本州の岩木川水系集団とのあいだに融合文化の「青苗」集団が介在し、さらに「青苗」集団と道北の擦文集団のあいだには、「青苗」集団と祖印を同じくする道央日本海沿岸の擦文集団が介在していた。つまり擦文集団と本州集団のあいだにはグラデーショナル状の同族体制が敷かれていた。

この体制は擦文集団にとって本州集団の異族性を段階的に希薄化するものであり、「商品」の直接的な流入を防ぐバッファの役割を担っていたと思う。青苗文化は、本州の商品を擦文社会の互酬性の文脈に埋め込み、同時に擦文社会の産物を互酬性の鎖から断ち切って本州に流通させる、異なる価値体系の変換装置。本州文化と擦文文化の衝突を避けながら両者の補完的関係を持続する「共生」のシステムであったといえそうだ。

10世紀以降、本州青森の集団は製鉄や須恵器生産など手工業生産の拡大によって、一方、擦文集団は干鮭や獣皮の生産など漁撈・狩猟への特化によって、日本海を中心に交易を拡大していった。

両者の生業の乖離と差異の拡大こそが、たがいの相補性を拡大するものにほかならなかったが、差異が拡大するほど両者の直接的な接触は強い摩擦を伴うことになる。つまり差異を構造的に相補性に転じ、固定化するには青苗文化という共生システムがなにより不可欠だったといえる。

### 3 縄文エコシステムからアイヌエコシステムへ 商品経済とエコシステムの転換

一 世紀代から活発化した擦文社会と本州の交易は、日本海沿岸集団の流通組織化を招くと同時に、交易品の生産にあたる内陸集団の社会も大きく変えていったようだ。

河道切り替え以前には日本最大規模の河川であった石狩川は、サケのバイオマスもまた最大であったとみられる。その大量のサケが遡上したのは三つの産卵場地帯（札幌扇状地・千歳川上流域・上川盆地）。サケの産卵床は湧水に成立するが、三か所の産卵場地帯は石狩川水系における扇面面積一<sup>＊</sup>平方以上の大規模な扇状地の分布と重なっており、扇状地の豊富な湧水を背景に成立していたことがわかる。

石狩川水系の擦文文化の集落は、一 世紀前後からこの三つの産卵場地帯に分布するようになる。それぞれの集落を詳細にみってみる。

石狩川水系の集落はどれも、産卵床である小河川にもうけた遡上止め漁場に成立しており、サケの骨も大量に出土する。その様相はまさに内水面の漁業集落、漁村というべきもの。サケ漁を産卵場でおこなうのは、遡上したサケの脂肪が落ち、変質にくい長期保存用の干鮭の生産に適したからであり、近世アイヌもサケ漁は沿岸ではなく内陸の産卵場でおこなっていた。

もちろん縄文時代にサケ漁がおこなわれていなかったわけではない。最近では道央の石狩市紅葉山四九号遺跡で縄文中期のサケ漁場跡もみついている。ただし縄文文化の集落はサケの産卵場付近に立地するものもあるが、水質の関係などでサケの遡上がない水系にも分布して一様ではない。これに対して石狩川水系の擦文集落は、サケの遡上しない川筋やわずかでも産卵場から離れた場所には立地しない。擦文時代の石狩川水系の集団にとってサケ漁は選択の余地のない、不可欠な生業へと質的な転換を遂げていた。

この転換を上川盆地の例でさらに具体的にみってみることにしたい。

上川盆地は石狩川水系の産卵場地帯のひとつであるが、一九五 年代後半以降サケの遡上は絶えている。わたしの調査によれば、盆地内にはかつて二本の遡上河川（石狩川・忠別川）と三個所の産卵場があったようである。この三つの産卵場地帯は漁の生産性（遡上量×水量や河床地形に規定された漁法の効率性）の点で格差があり、産卵場B A Cの順に漁場のヒエラルヒーを構成していたとみられる。

縄文と擦文の遺跡分布をみみると、右下の擦文時代では、一 世紀前後に成立した上川盆地の擦文集落は、三つの産卵場のなかでもっとも生産性が高い産卵場Bに限定的に分布していることがわかる。擦文集落が立地しているのは盆地床を構成する三段の河岸段丘のうち最下面で、湿地が点在し大洪水のたびに冠水することから、堤防が未整備な開拓当初には居住地としては利用されなかった面。実際、擦文の竪穴住居には冠水の痕跡がみられるものもある。

これに対して右上の図、縄文時代では、遺跡の分布が産卵場とまったくかわらず、産卵場より上流の地域や遡上河川から離れた台地上、あるいはサケの遡上しない川筋にも分布しており、サケとのかかわりがきわめて希薄。サケ漁はおこなっていたのだろうが、産卵場に集落を構えてまでサケ漁に特化することはなかったといえる。縄文時代のサケ漁は生業における多様な選択肢の一つにすぎないもので、当時は特定の資源に偏らない柔軟な生業体系が展開していたとみられる。

縄文遺跡では擦文集落が載る最下の段丘面に分布する遺跡は少なく、そのうち一個所を調査した結

果、シカの落とし穴猟場のあとで集落遺跡ではないことが明らかになった。縄文時代には洪水の危険がある最下面は居住地ではなく、猟・漁場となっていたわけだ。

次に左上の近世の上川アイヌをみると、二次的な産卵場地帯もすべて漁場として開発し、三つの地域集団に分かれて徹底的にサケ漁をおこなっていた。また三つの地域集団を統括する総首長はもっとも生産性の高い産卵場Bの地域集団に属していた。つまり擦文時代以降、上川盆地の社会はサケ産卵場とそのヒエラルヒーに規定されていた。このようなサケ漁に特化した社会の成立は、上川アイヌの主要な移出品が干鮭であったように、交易にかかわっていたと思う。

次に左下の図、上川アイヌの集落や地域集団の分布はまた、丸木舟の遡上限界や河川の状況に応じた丸木舟の乗り換えシステム、すなわち交通・流通の問題とも深くかかわっていた。擦文とアイヌに共通するこうした環境適応をアイヌ・エコシステムと呼ぶ。

これに対して柔軟な生業体系をもち、交通が社会のあり方を規定する大きな要因とならない縄文時代の環境適応を、縄文エコシステムと呼ぶことにしたい。

縄文エコシステムの特徴を柔軟性・多様性・分散性とすれば、アイヌエコシステムは硬直性・一様性・集中性といえることができる。

一 世紀を境とする縄文エコシステムからアイヌ・エコシステムへの転換は、このようなレベルにとどまるものではなかった。縄文～続縄文文化における地域的な文化圏のあり方をみると、時期によってちがいはあるものの、基本的に道東・道西・道南というタテの分割としてあらわれる。この地域性には気候や植生のちがいがかかわっていたとみられる。

しかし一 世紀以降の地域文化圏は、北海道を大きく南北に分割するかたちであらわれ、それが近世まで継承される。このヨコの分割原理はそれ以前の気候・植生のちがいとは異なっている。

わたしはこれを、北海道を取り巻く海流のあり方がかかわっていたのではないかと考えている。この海流にもとづく地域区分は、一 世紀以降の交易の活発化にともない、海上交通・流通のあり方が大きく浮上するなかで、擦文社会の地域展開を規定するものとなっていったと考える。

この内陸型エコシステムから海洋型エコシステムへの転換は、気候・植生への素朴な、受動的な適応から、環境上の差異を超越した積極的適応への転換といえる。

こうした重層的・複合的な環境との関係の変化、アイヌエコシステム化は、世界観の変化も伴うことになった。

アイヌの集落の守護神、コタン・コロ・カムイはシマフクロウ。シマフクロウはサケやマスを食料としており、川筋のサケの産卵場がテリトリー。アイヌの集落は、同じサケの産卵場に展開していたため、集落の守護神になったと考えられている。とくに上川盆地のようにサケに対する比重が大きな社会では、このシマフクロウが非常に位の高い神とされていたようだ。

上川盆地の縄文時代の集落は、さきほどみたようにサケの産卵場とまったく重ならないから、もし縄文時代にも集落の守護神というものがいたとすれば、それはシマフクロウで

はあり得ない。つまり、シマフクロウが集落の守護神となり得たのは、10 世紀以降のことになる。

アイヌの世界観は、縄文時代の世界観をとどめるもののようにいわれるが、実は 10 世紀以降の、アイヌエコシステムの成立と相即する部分も大きいのだらうと思う。